

途切れながら、繋がって

京都に暮らして8年が経った。

生活を始めてまず興味を持ったのは、街中の至るところに点在する「お地藏さん」だった。こうした古い信仰の対象が身近にあることは、この土地においては自然なことだと思えるが、私が惹かれたのはお地藏さんそのものよりもその脇に供えられた花、更にはその花を供えたはずの見知らぬ誰かの存在だった。日々の散歩コースに避けようもなく含まれる寺院の境内や墓地にも、やはり多くの花が手向けられていて、お盆やお彼岸ともなればまるで広大な花畑の様相で、それらがだんだんと萎れていく様子もまた儂く美しかった。

もうひとつ心を惹かれたのが、出町柳の三角州（いわゆる鴨川デルタ）を挟んだ賀茂川と高野川の飛び石を渡る人々の姿だった。子供からお年寄りまでちょっとしたスリルを味わいながら、次々に石の上を飛び移ってゆくのを、賀茂大橋から俯瞰していると、それはひとつの舞台のようにどこか浮世ばなれした光景で、手を取り合う親子も、賑やかにはしゃいでいる学生たちも、皆いつかはひとりて川の向こう側へ渡る日が来るのだ、といったことにまで想像が及んだ。

古びた小さな石像や墓石を抛り所に無数の人々の祈りの気配が漂う中で、ひとりひとりの短く孤独な時間が、途切れながら、時折交わって、河の流れのように脈々と繋がってきたのだろう。六道の辻の傍のこの場所に、そんなイメージを拾い集めて、私の京都の記憶に一旦区切りをつけようと思う。

2023年 春　松永 亨子

01 A Tale of Two Readers: 御法

『源氏物語』のページをランダムに立方体に貼り込み、各面に印刷されているテキストからAIが自動生成した画像にアナログで加工を施したイメージを重ねた。「御法」の段では、紫上の鳥辺野への葬送の場面が描かれている。作品タイトル「A Tale of Two Readers（二人の読者の物語）」はChat GPTとの対話の中で提案されたもの。発展する通信技術の受容により変様する個人の読書体験をテーマとして、2009年より制作していたキューブ形の作品群の続編となる。

02 Offerings (bound version)

京都の街中のお地藏さんの祠に供えられた花の写真を集めた。京都での生活を始めてまもなく、街を隙間なく埋

め尽くすように存在する祠の多さと、それらが常にアクティヴであることを示すように、花を絶やさず供え続ける人々の存在に心が惹かれた。制作当初は見開きを縦に連ねて吊り下げる形で展示していたが、冊子状に綴じ直した。左右一対で供えられている花を観音開きのように捲って展開する構造となっている。

03 Whorls 00

墓地に供えられた花の写真を円環状にコラージュした作品。四季の移ろいに寄り添って、繰り返される円環的時間の中で、池の上にあちらこちらで広がった水紋が偶然に交わるように、人々の短い時間が時折重なる一瞬の、かけがえのなさを想う。立体的な3層構造になっており、最下層には墨流しの模様が輪を描く。折り畳むと扇型になる。whorl（ワール）は、花を構成する器官が同心円状に並ぶ構造を指す。

04-08 途切れながら、繋がって I-V

檜扇の形に、日常のささやかな記憶の断片をすくい上げた。私たちはいつか「川の向こう側」に渡るが、それまでのひとりひとりの孤独な時間の集積が、絶えることのない流れを繋いでゆく。檜扇は木簡を綴ったものが起源とされ、儀式のためのメモや和歌を贈る際のメディアとしても用いられたことから、最も古い書物の一形態を継承するメディアといえる。また、流水と扇面はいずれも古くから日本人に好まれてきたモチーフでもある。

09 Intersection; Gion, Kyoto

八坂神社前の交差点を行き交う人々の姿を、信号が一巡する間、7秒置きに定点撮影した写真を等間隔に並べて綴じた作品。日々すれ違う人々は、奇跡的に同じ時間と場所を共有しているにも関わらず、お互いに無名のまま一瞬後には記憶の中から消え去ってしまう儂い存在である。糊を使わず、紙の帯を編み込むことで綴じるオリジナルの製本構造は Waterwheel Binding と名付けた。

10 KAMO: Stepping Stones

鴨川の河原で拾い集めた小さな陶片、過去の人々が残した痕跡の上を、今を生きる人々が軽々と飛び越えてゆく。この繰り返して土地に記憶が堆積する。箱には一つずつ陶片の実物が収められ、所有者との間に僅かに現実的な接点を生み出す。切り込みを入れたパネル部分が左右に回転するように動く構造は、アメリカの製本家Hedi Kyle氏の考案によるPivoting Panel Structureを用いた。

11 花待つ日々

春を待ちわびる気持ちは、今も昔も変わらず、まだ寒い晩冬のある日の風景に、咲き乱れる春の花を重ねる白昼夢を見る。縦に連なるように開けられた穴は、モールス信号に変換した和歌である。また、金泥で打たれた点は、撮影日の夜の星空になっている。今昔を対比するように、スタイルの違う二幅の掛軸に仕立て上がった。

右：思ひやる　心やかねて　ながむらん
まだ見ぬ花の　面影にたつ
（風雅集・鴨長明）

左：朝夕に　花待つころは　思ひ寝の
夢のうちにぞ　咲きはじめける
（千載集・崇徳院）

12 UBI SUNT

墓地に供えられた花の写真をコラージュし、小さな屏風のような折本に仕立てた。鈴木其一『朝顔図屏風』（メトロポリタン美術館蔵）の構図を引用し、鮮やかな瑞々しい姿から枯れ果てるまで、様々な状態の花が左右に∞を描くように、広がっている。タイトルのUBI SUNTは、「彼ら（過去に生きた人々）は何処にいるのか？」という故人に思いを馳せる意味合いを持つラテン語の慣用句。